

3. 授業改善アンケート調査結果

【2013 年度 前期 授業改善アンケート調査結果】

3-1. 授業改善アンケートの概要（2013 年度 前期）

人間科学研究科では、平成 16 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。平成 22 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2013 年度前期アンケート回答期間：平成 25 年 7 月 16 日～8 月 5 日

2013 年度前期アンケート回答期間（集中講義 A）：平成 25 年 8 月 9 日～8 月 11 日

（集中講義 B・C）：平成 25 年 9 月 20 日～10 月 18 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 23.4%である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

平成 25 年度前期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象科目数	回答数		対象科目数	回答数
基礎科目	8	256	共通科目	5	18
共通科目	5	15	先端人間科学科目	3	6
行動系科目	11	87	行動学系科目	9	27
社会系科目	15	78	社会学系科目	9	30
教育系科目	12	148	人間学系科目	8	20
グローバル系科目	11	33	教育学系科目	10	47
			グローバル人間学系科目	13	44
学部計	62	617	大学院計	57	192
計(大学院+学部)				119	809

回収率：23.4%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、平成 22 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

3-2. 授業改善アンケートの結果（2013年度 前期）

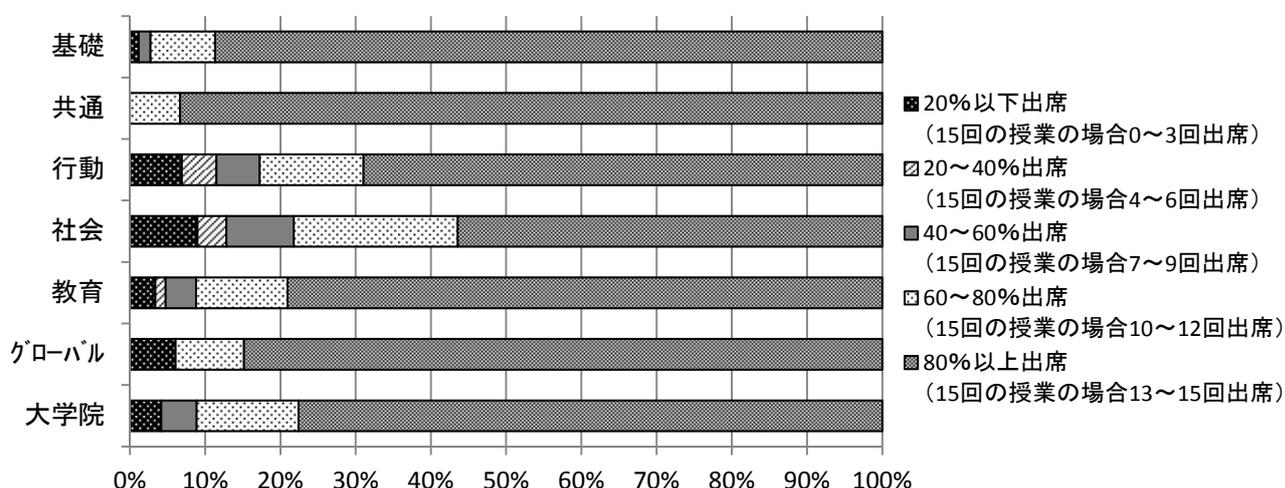
ここでは、平成 25 年度前期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目については除かれ、選択式の設定についてまとめている。

集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって 1 科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。また、回答率が平成 22 年の KOAN 導入以降次第に減少してきており、平成 25 年度前期の授業改善アンケートでは回答率は 3 割を下回った。現状では一部の学生の声のみが反映されている状態にあるため、評価委員会でも回答率向上のための取り組み、方法の見直しなどを検討をしていく予定である。

これまでに教務委員会が中心となり、授業開始時点での指導やシラバスの改変などを行ってきた。昨年度比では、「シラバスを読んでいない」という回答した学生が減っており、そのような成果が挙がっているとも考えられる。予習時間については、人間科学部の専門科目の受講が増える IV セメスター、V セメスターごろからは実験実習、演習などが増えることから、それらの科目では予習・復習が必要とされるものの、本アンケートの対象からは演習・実験実習科目は除かれていることから、それ以外の講義科目に割かれた時間として理解する必要がある。「この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか?」「この授業は全体として良い授業だったと思いますか?」といった項目については、昨年度の前期の結果からは改善が見られた。授業改善アンケート、教員からのコメント、フィードバックの実施により計画→実行→評価→改善のサイクルを有効に働いた可能性が考えられる。平成 25 年度前期では、授業全体に対する評価を 5 段階で尋ねる設問 13「この授業は全体として良い授業だったと思いますか?」の回答の平均値が 4.00 であった（1~5 の範囲で数値が高いほど高評価となる）。前年度前期の平均値 3.79 を若干上回る結果となった。これらは、大半の学生にとっては満足できるものとして評価されたと考えられる。

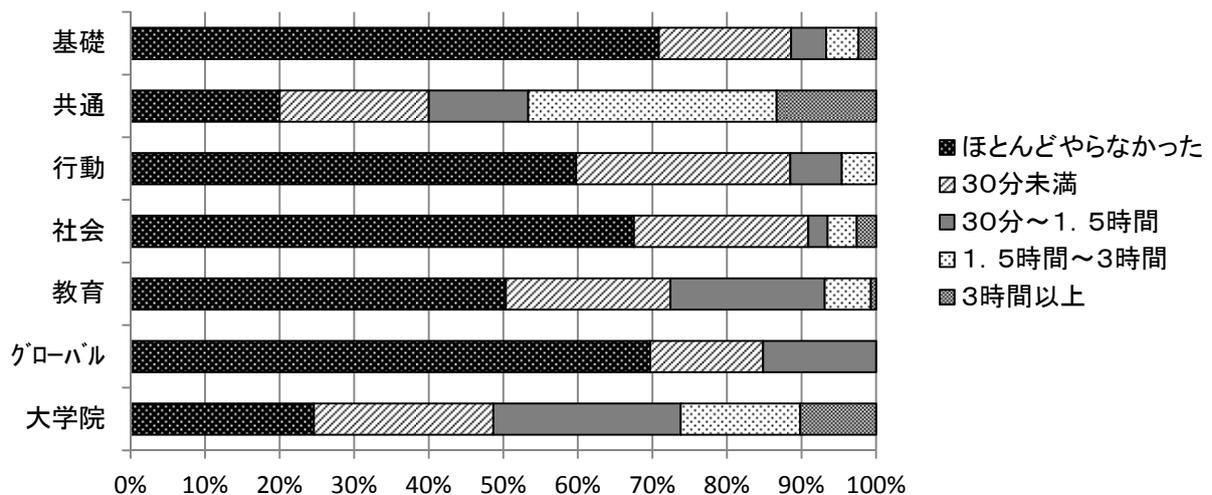
各設問の結果の詳細は以下の通りである。

1: この授業へのあなたの出席率はどうでしたか?



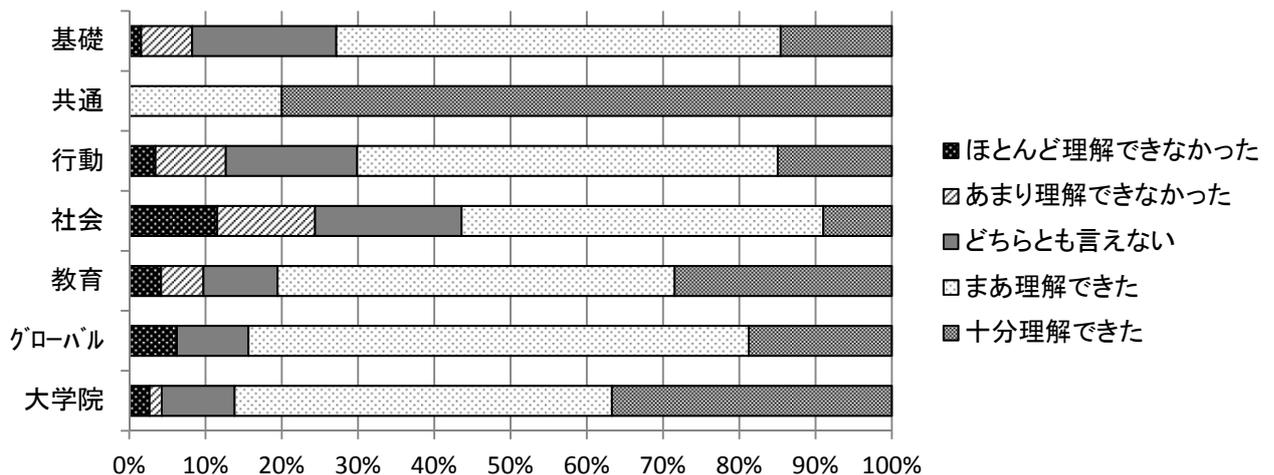
平均値 : 4.61 標準偏差 : 0.92

2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



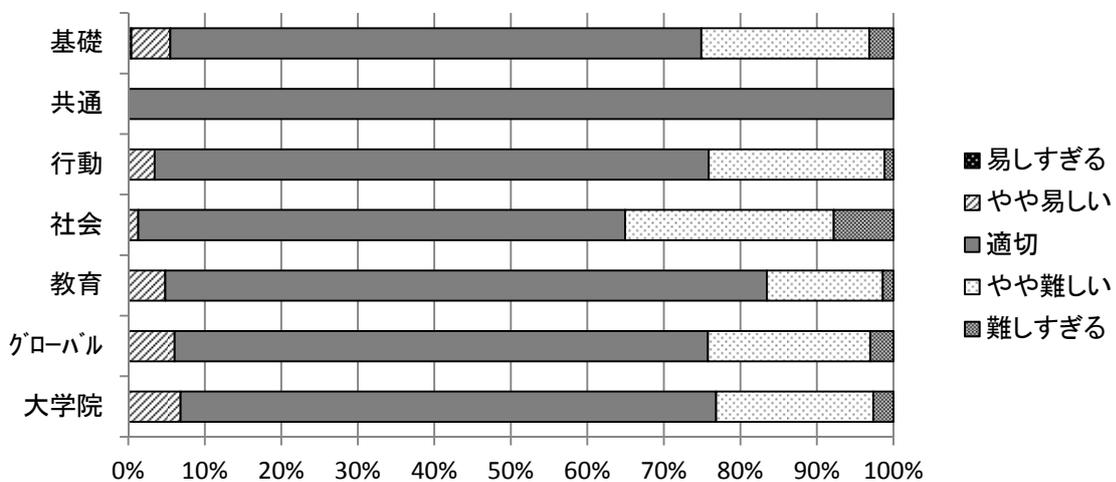
平均値：1.86 標準偏差：1.14

3：授業内容は理解できましたか？



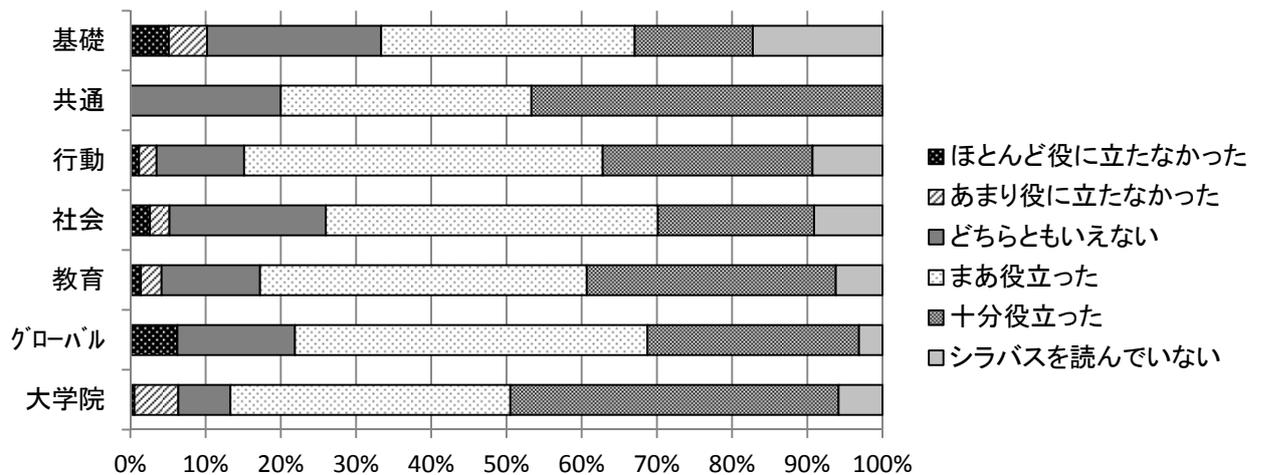
平均値：3.87 標準偏差：0.96

4：授業内容の難易度はどうでしたか？



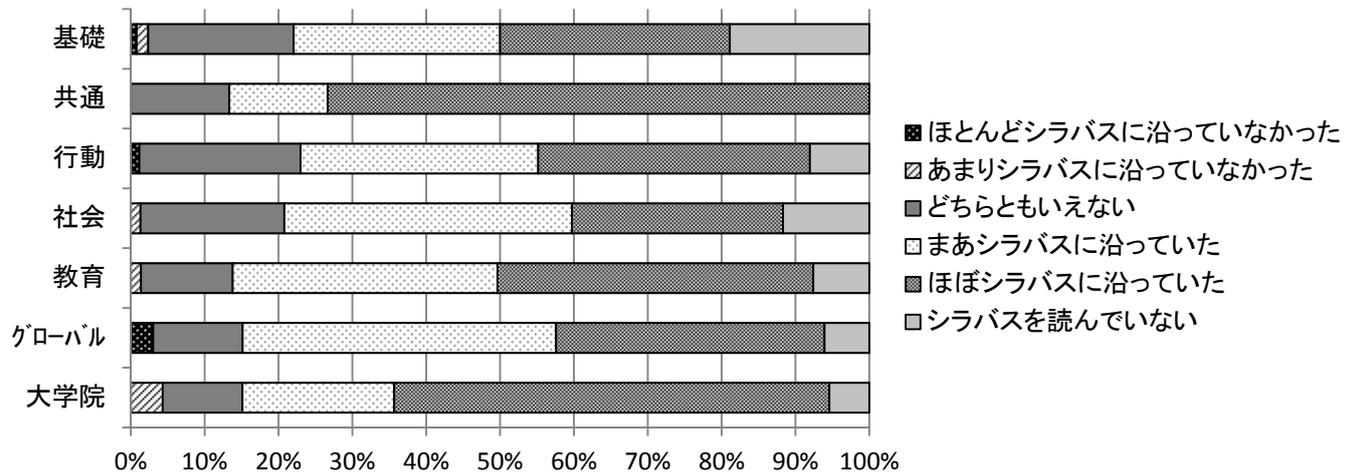
平均値：3.21 標準偏差：0.57

5：シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



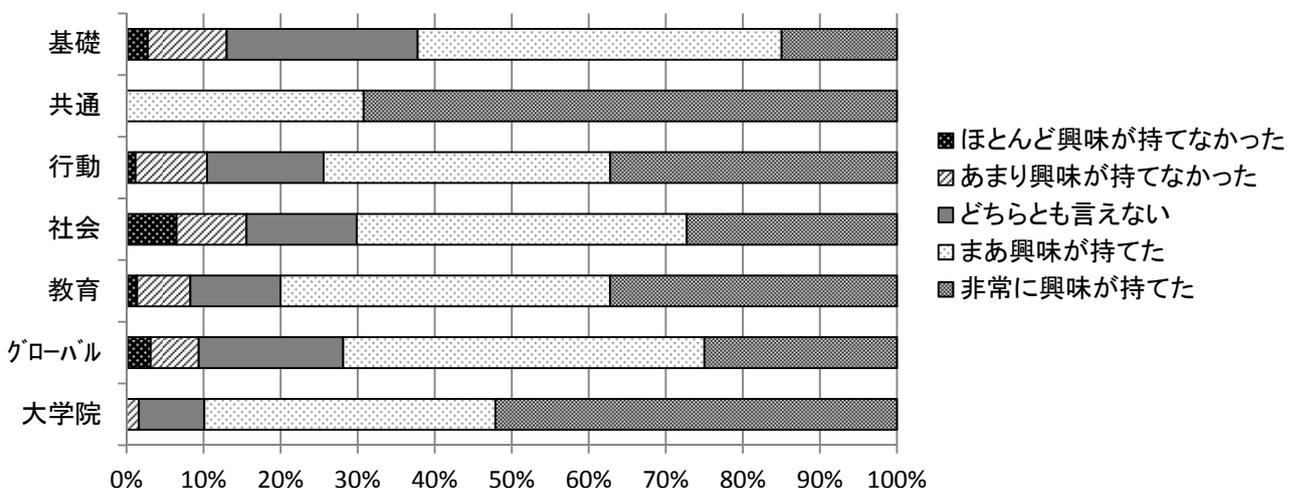
平均値：3.57 標準偏差：1.50

6：授業はシラバスに沿って展開されましたか？



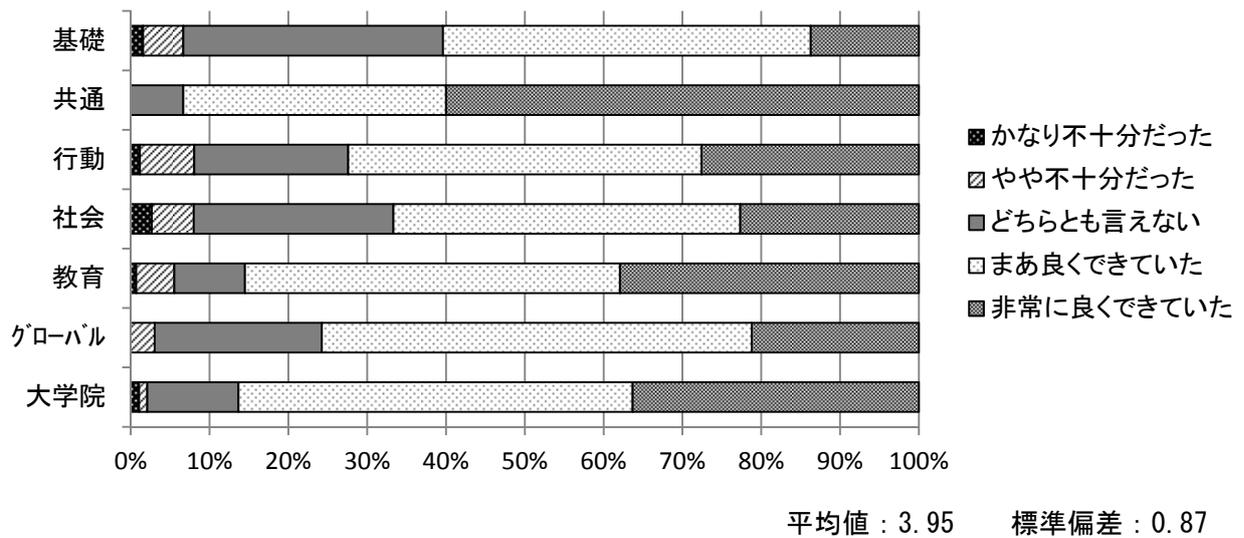
平均値：3.76 標準偏差：1.54

7：授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？

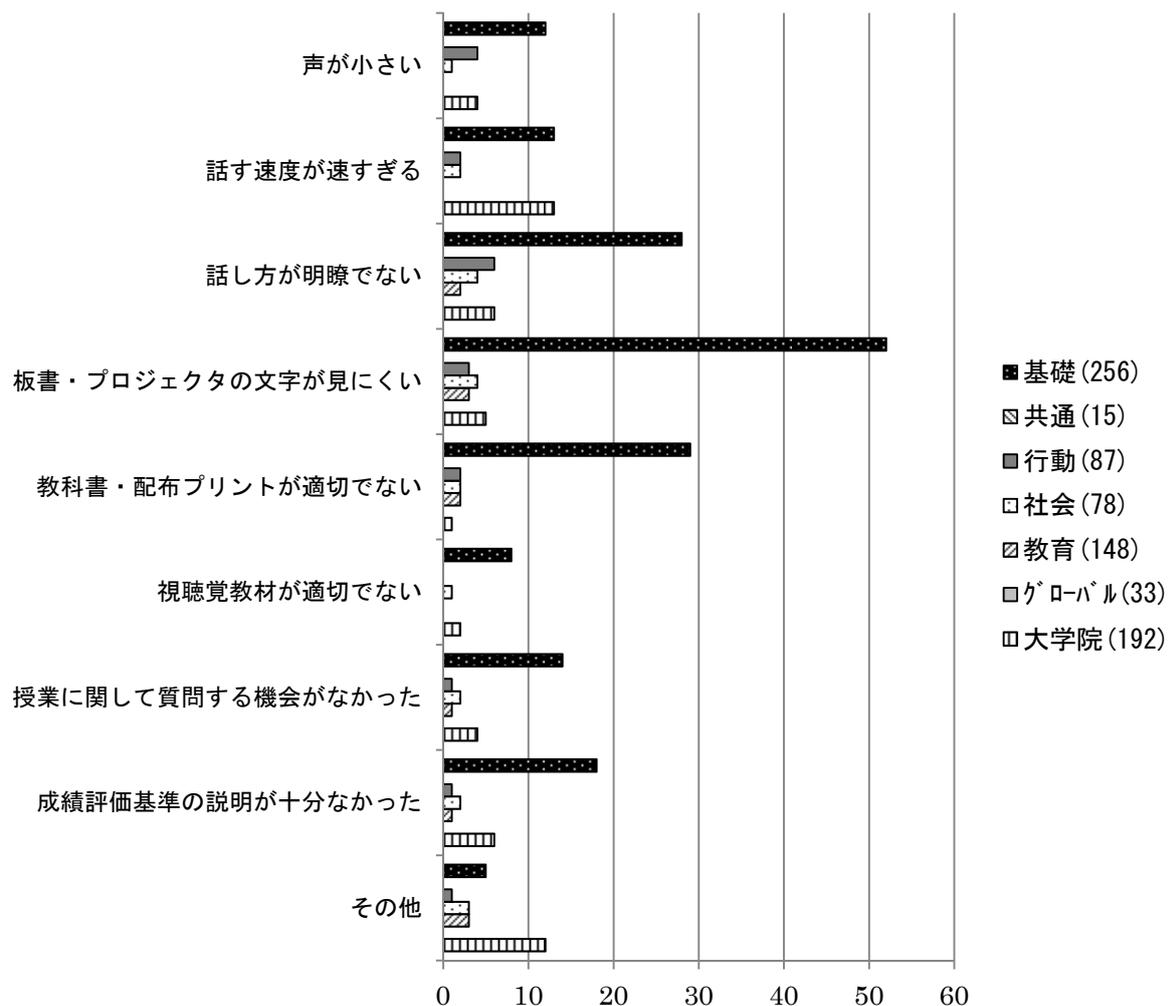


平均値：3.97 標準偏差：0.97

8：授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？

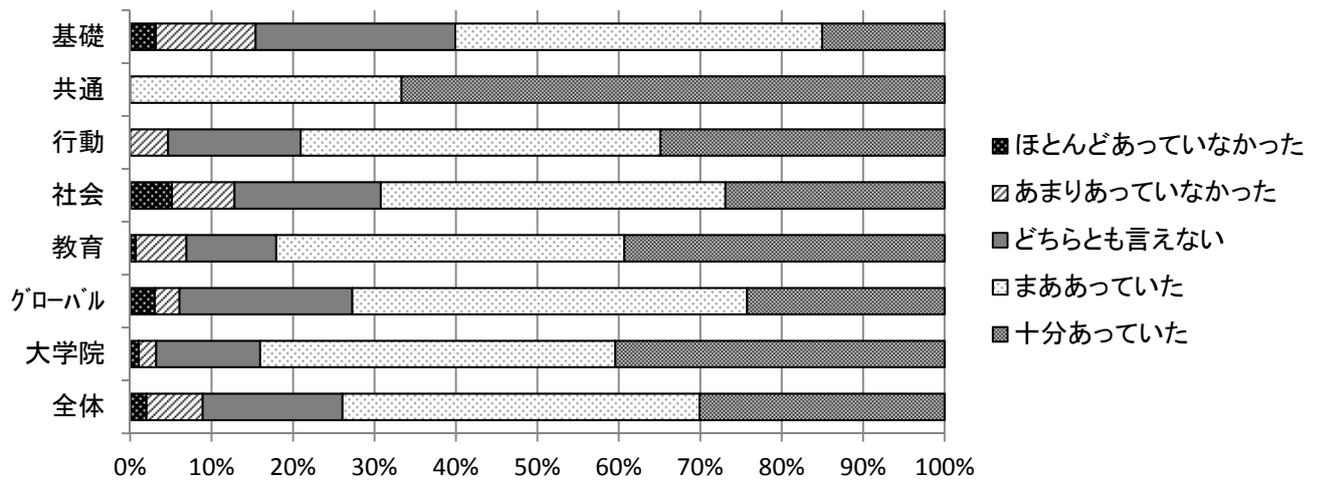


9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。()内の数値は各カテゴリーの回答数。



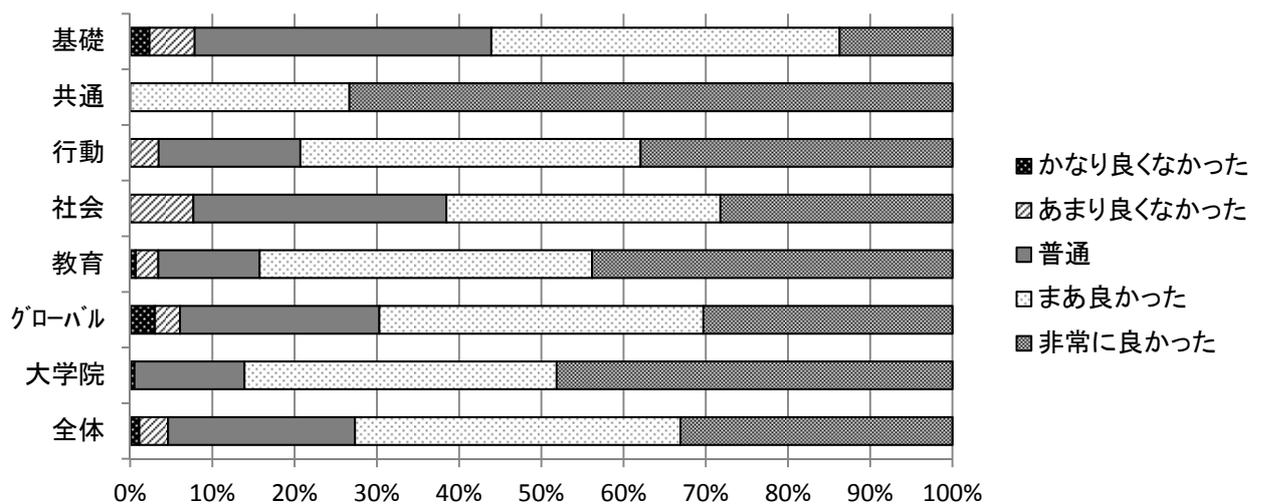
全体の回答数=809

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.93 標準偏差：0.96

13：この授業は全体として良い授業だと思いますか？



平均値：4.00 標準偏差：0.89

問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは質問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2013 年度前期に開講された学部のアンケート対象科目 62 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 25 科目で、そのうち平均値が 4 以上の科目は以下の 14 科目であった。

2013 年度前期 学部講義科目 満足度の平均値が 4.0 以上の科目

	回答数	問 13
		平均値
教育制度学	16	4.75
感覚生理学	10	4.70
教育工学 II	15	4.67
臨床心理学 II	13	4.54
比較行動学	10	4.40
高齢者行動論	16	4.38
教育心理学 II	17	4.31
ジェンダー教育学	13	4.31
学校社会学	19	4.16
臨床教育学概論	18	4.11
心理学実験	22	4.09
宗教社会学	11	4.09
文化社会学	13	4.00
情報処理心理学	10	4.00

3-3. 担当教員からのコメント (2013 年度 前期)

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載）。

赤井 誠生
情報処理心理学・基礎心理学特講 I
授業の難易度を含め、内容はほぼ適切であるようでした。発音が不明瞭という指摘が若干あり、今後改善していきたいと考えています。

足立 浩平
心理統計法・行動統計科学特講 II
行動統計科学研究分野の人以外にとっては、統計学は道具と考えられ、その細部がわからないことに、こだわる必要はありません。

石井 正子
紛争復興開発論 I
ディスカッションが役に立ったというコメントをいただきましたので、来年度以降も継続し、さらに充実するように工夫をしたいと思います。
紛争復興開発論特講 I
話し方が早い、明瞭ではないというコメントをいただきましたので、来年度以降は注意をしたいと思います。

井村 修
臨床心理学 II
本講義は、教員による講義が 5 回、ビデオ学習が 1 回、学生によるプレゼン 8 回から構成されている。受講者は心理臨床の事例を事前に読み、プレゼンおよび討論を行うことが求められた。予習が必要な授業であり、受講生の負担は比較的大きかったと思われる。しかしその分身についてもあったと推測される。評価は出席、受講態度、レポートによって行われた。シラバスとの対応や評価方法の説明には工夫の必要性を感じた。受講生のプレゼン能力の高さは印象的であった。一方、プレゼン担当でない受講者の質問の仕方は、個人差が大きく、非常に的確な質問をする者と、そうでない者のばらつきが大きかったようである。予習のさせ方に今一段の工夫が必要であろう。今期から TA を使ったが、受講者の評価も良好であった。
障害児(者)心理学特講 I
本授業は公開講座「障害児者のこころと体をはぐくむ臨床動作法」との合併授業であり、地域の障害児者とその保護者、支援学校教諭、臨床心理士、大学院生やボランティアから構成されている。「障害児(者)心理学特講 I」の受講者（大学院生）は、障害児者に臨床動作法を適用し、事例のアセスメント、介入技法、理論的検討をスーパーバイザーの指導の下に体験的に学習した。

かなり時間的、労力的に負担の大きい科目であったが、受講者は積極的に参加していた。肢体不自由、自閉症、知的問題を有する障害児者の行動や心理に関する理解が深まったものと考えられる。またノンバーバルなコミュニケーションの意義や重要性の学習に寄与したと思われる。

菅阪 満里子

認知脳科学論

この授業は本年度で終わります。分かりにくいところもあったかもしれませんが、少しでも他分野の研究内容を知ることによって役立てればと思います。異なる専門分野の人たちが、将来、学問領域を超えた共同研究に発展できることを目指しております。そういう意味でも役に立てばと期待しております。

小野田 正利

教育制度学

隔年開講の科目で、教育裁判例を扱って、学生参加型の「模擬裁判」形式でおこなう授業であるが、実際の授業展開でも、また今回のアンケート結果からも、受講生はよく事前学習をしておいてくれていると思った。今年は、扱う裁判例の種類に偏りがないように、また新しく加えた判例が5つほどあったが、いずれも現代社会を象徴する教育動向、あるいは教育人権に関わるものであり、手応えもよかったと思う。事実、その結果がアンケートの高評価に現れていると思う。授業の最初に、全体を通しての流れや予定を示すプレゼン資料を配付して説明すること、1週間前ではなく、2週間前に課題資料を準備する方法もよかったのではないかと考えている。ただ出席状況は、後半（6月以降）になるといくぶん低下してきたことが残念であった。

川端 亮

宗教社会学・宗教社会学特講

アンケートへの回答者が3割程度とまだまだ少ないので、改善をしていきたい。今回は、ゆっくりと話すように努力したが、その分時間が足りず、毎回、質問の時間を設けることができなかった。また、試験の結果をみると、理解が十分ではない人も見られた。今後は、質疑も取り入れて、受講生の理解を確かめながら授業を進めていくように改善したい。

吉川 徹

社会データ科学・社会データ科学特講

あまり充実した授業とはいえなかったのですが、高い評価をいただいて、大変ありがたいと思っています。

木村 涼子

ジェンダー教育学・ジェンダー教育学特講

受講生のみなさんの関心をくみ上げつつ、できるだけ双方向の授業になるように工夫をしながら、授業をすすめました。受講生の発表時間を設けることによって、受講生相互の学習機会も確保で

きたと思います。そういう点は比較的高く評価してもらえたと思う反面、当初のシラバスの予定を修正・変更することが多かったため、シラバスにあまり沿っていない、時間が足りないという課題も指摘していただきました。次年度はそれらの課題にいかに対応するかを考えて、授業計画を立てたいと思います。

熊倉 博雄

行動形態学

講義冒頭でも触れましたが、現在の人科カリキュラムにおいては生物系科目が絶望的に少ないため、本科目は盛りだくさんな内容を取り扱わざるを得ないです。そのため、講義の進行も、話す速度も速くなりがちです（元来が早口であるというのも確かですが）。それにもかかわらず、学生諸君がよくついてきてくれたことはありがたいことだと思っています。

生物人類学特講Ⅰ

少人数での大学院科目ということで、受講生諸君の同意を得た上でシラバスを逸脱した実習形式の内容としました。熱心に取り組んでもらって良かったです。

佐藤 眞一

高齢者行動論

学生の評価はおおむね良好であった。しかし、予習をする学生が少なく、課題の提出が課題であろう。学生との相互的やりとりが少なかったため、今後は工夫をしていきたい。

臨床死生学・老年行動学特講Ⅰ

参加した大学院生の評価は良好であった。しかし、予習をする学生が少なく、課題の提出が課題であろう。授業の内容よりも進め方を気にする学生がいるので、工夫が必要かと感じた。

鈴木 広和

動態地域論Ⅰ・動態地域論特講Ⅰ

授業中に学生のみなさんの考えを聞いたり、討論する時間を、もう少し増やしたいと思います。とりあげる話題を増やす、あるいは変えることを検討します。

高田 一宏

コミュニティ教育学特講

担当者が所属する「教育文化学分野」以外の学生も受講していたが、そうした受講生に対しては、もっと丁寧に解説・説明すべきだったと思う。

千葉 泉

多文化共生社会論Ⅱ

シラバスが授業の内容をより具体的に反映するように、来年度に向けて努力したい。

多文化共生社会論特講Ⅱ

授業が受講生の興味をより喚起するよう、来年度に向けて努力したい。また、もっとゆっくり話すように心がけたい。

中澤 渉
教育社会学・教育社会学特講
やや内容が難しすぎたようだ。内容を詰め込み過ぎている感があるので、もう少し精選したほうがいいかもしれない。受講生はあまり普段、授業に関連して勉強している形跡が感じられないので、授業内容を精選したうえで、プラスアルファを課題として、普段の授業で提出させるなどしたほうがいいかもしれない。講義室のレイアウトが不自然（本館 33）で、確かに学生はスライドを見にくいだろう。これは教員としては如何ともしがたい。教員としてもやりにくい。

中村 安秀
医療通訳論 I
おおむね、満足していただきありがとうございました。シラバスに日程が記載されておらず、人間科学研究科以外の学生のための周知ができていなかったため、この講義を受講したいのに、できなかった学生がいたという指摘は、真摯に受け止めたと思います。今後は、本講義科目のように、他研究科の院生や学生の受講が多い場合には、日程などを大学全体に周知できるように格段の配慮を行っていきます。
医療通訳論 II
アンケート結果を見る限り、おおむね満足していただきありがとうございました。
国際協力学 I・国際協力学特講 I
学部は 8 名、院生は 10 名の方から回答をいただいた。受講生全体の人数からすると、25%程度の回答率ではないかと考えられる。多数の方から満足という回答をいただいた。貴重なコメントをいただいた。病院視察を希望されているコメントがあったが、数十人規模での病院見学は実施上の制約が大きく、実現可能性は低いと考えられます。受講生の人数が少ない「医療通訳とコミュニケーション」では、病院見学を実施する予定である。また、医療通訳に関する講義ではなく、「国際協力」の話を知りたいという希望が書かれていた。まさに、2014 年度からは、本講義科目は、英語による国際協力の講義に衣替えする予定である。
国際健康開発論特講
おおむね満足していただきありがとうございました。
人間開発学特講
おおむね満足していただきありがとうございました。オムニバス方式にもかかわらず、全体的に高い評価をいただき、安心しています。「授業中に質問する機会がなかった」という 1 名からの回答について、調査いたしました。しかし、多くの教官は質問する時間を設けていたとのことでした。具体的な状況を提示していただければ、今後の改善につなげていきたいと思えます。

中山 康雄
人間科学基礎理論
授業の難易度に関して、難しいと感じている学生の数思ったよりも多かった。授業の最後に質問やコメントを書かせるなどの方法を試み、その疑問に次の授業で答えるなどのことをすべきかもしれない。

人間科学基礎理論特講

大学院の講義に関しては、専門分野でとっている学生がいたので、難易度は高くないと感じられていた。積極的に授業に参加してもらう方法を考えるべきかもしれない。

西森 年寿**人間科学概論Ⅲ**

全体的には平均程度の評価をもらえたと理解しています。各研究室の研究内容を紹介するという主旨から、また、リレー講義という形式上、どうしても拡散的な内容となってしまう、その点で不満を持たれるのであろうと理解していますが、初回のイントロダクションの工夫（学習方法の説明も含めて）などで、より配慮をしたいと考えます。ご意見ありがとうございます。また、マイクについては教員の対応できる範囲で注意したいと思います。

教育工学Ⅱ・コミュニケーションメディア特講Ⅱ

回答いただけた範囲では、概ね満足していただけたようです。来年度は、難易度をもう少しあげて、深みをだし、そして、それが予習・復習を促せるように構成することが課題であると考えています。また、一件、「話す速度が速すぎる」という声がありました。たしかに焦ってそうなる箇所があったようにも思います。気をつけたいと思います。

Robert Scott North**比較社会学**

何回か「解答するよう」と学生に進めていったが、結局解答者は2人だけとなって、このアンケートのやり方を考え直す必要があるのが明確です。KOANの評判があまり良くないし、使えば使うほど嫌いになる傾向が強いようですから、KOANと関係ない方法（紙媒体?!）low-techに戻った方が良くはないでしょうか。

人間科学概論Ⅱ

学生のコメントを読んだが、オムニバス形式の授業なので、自分個人は、どのように受け止めれば良いのか分かりにくいです。

比較社会学特講

パワポを使用する要求は理解しています。来年度はもうちょっとビジュアルな授業に試みたいと思いますが、講義内容を解釈し、make sense of what the professor is sayingは、伝統的な学生の仕事です。パワポにすると、容易に授業内容を変更することができなくなります。明瞭性と弾力性のバランスをとりたいと思います。授業参加、アンケートの解答ありがとうございました。

社会問題の映画の読み方(基礎ゼミ6)

受講者14名の内4名しか答えていないのが残念です。とにかく、答えてくれた学生の評価はまあ良かったので、来年度も同じような授業をやりたいのです。

野坂 祐子**教育心理学Ⅱ**

大半の学生の関心に沿う内容を提供できたと思うが、予習をしていた学生がほとんどいなかったことから、今後は課題を提示するなど学生の自習を習慣づけるような指導を行いたい。

Don Bysouth
Special Topics in Human Sciences I (Bysouth)
The G30 student evaluation survey indicated that 100% of students were very satisfied with the course overall. In addition, 100% of the students thought the course activities, assessments, level of support, communication with professor and the professor's enthusiasm were very good.
Global Citizenship Seminar (Bysouth, Lam, Kim)
The G30 student evaluation survey indicated that 100% of students thought class activities were helpful and that professors were very enthusiastic. Over 90% of students were very satisfied with course overall, and thought that the classes were well organised and the assessment was fair. Over 80% of students were very satisfied with support from professors, that the professors communicated well with students, and that the purpose of each class was clearly explained.
Statistics for Social Research Seminar (Bysouth)
The G30 student evaluation survey indicated that over 90% of students were very satisfied with the course overall. In addition, 100% of students thought the professor communicated very well, demonstrated enthusiasm, and that the classes were well organised. Over 90% of students thought the course expectations were very clear, that assessments were clearly explained, and that each class was clearly explained.

檜垣 立哉
哲学的人間学・哲学的人間学特講
まあまあ興味をもっていてくれてよかったのではないかと思います。話題は具体的なものにしようかと思いましたが、ちょっと分散したかもしれない。また5回分は非常勤の先生にやっていただいたという経緯があり、そのつながりがうまくいったのか定かではないかもしれません。

日野林 俊彦
比較発達心理学・比較発達心理学特講Ⅱ
学部・大学院一緒の講義で、青年期の内容だったため、内容が拡散し、焦点のしぼりづらい進行になったのではないかと反省しています。

福岡 まどか
地域知識論Ⅰ・地域知識論特講
第1セメスターの授業では、技芸のわざとその伝承について、また世界各地の先住民文化の保護について、という大きく2つのテーマについての講義を行いました。講義と映像資料の視聴を通して、これらのテーマについての様々な問題を考えていきました。受講した皆さんの関心も高く、毎回のコメントも大変興味深かったです。コメントの内容を検討して次回の授業に活かしていきたいと考えております。

地域言語基礎Ⅱ

この授業の中では、インドネシア語の基礎的な読解力を養うことを目指しました。セメスターを通して、文法事項の学習とともに、辞書を引きながら1ページ程度のやや長めの文章を読んでいくことができるようになったと思います。また検定の問題のレベルとしては、D級程度の問題を解く力を養うことができたと思います。

地域言語応用Ⅰ

この授業ではインドネシア語の応用的な読解力を養うことを目的としました。辞書を引きながら、さまざまなテーマに関する報道文などを読みました。検定のレベルとしては、C級程度の問題を解くことができるレベルになったと思います。

藤川 信夫**教育人間学Ⅱ・教育人間学特講Ⅰ**

講義内容の理解を深めるため、予習については講義の前提としていたのだが、必ずしも実行されていなかったようであり、その点が残念である。

三好 恵真子**人間環境論Ⅱ・人間環境論特講Ⅱ**

今年は受講生がいつもより少なめだったので、学生さん同士の議論の時間も充実させようと考えました。受講生の皆さんはとても熱心で、私自身も大変勉強になりました。レポートの提出時期が早いとのご意見がありますが、基本的に手渡しでの授受が適切であると思い、授業の最後を締め切り日としました。来年度以降検討したいと思います。

村上 靖彦**行為と倫理特講**

参加した学生の皆さんの発表の準備が非常に充実していたので、また積極的な発言が見られたので良い授業になりました。

Saori YASUMOTO**Popular Culture in Japan**

この授業では、ポピュラーカルチャーはどのように私達の日常生活やコミュニケーションのとり方に影響を与えているのか、また日本のポピュラーカルチャーと諸外国のポピュラーカルチャーとの関係性などについて考えました。文化・年齢・人種・性別の異なる学生が受講していたこともあり、様々な視点から課題に取り組める楽しい授業でした。

注：この授業は、英語で行われました。

Quantitative Research Methods

この授業では、量的研究調査を行う際の留意点について考えました。少人数での授業だったので、各学生のニーズに合わせた授業を行うことができました。

注：この授業は、英語で行われました。

八十島 安伸
感覚生理学
講義では、時間の配分が予定とは異なってしまい、今後の内容の再吟味の必要性を感じました。この点は反省点です。内容を理解してもらうためにも、さらなる工夫をするべきでした。あと、講義内容を基にして、受講生同士での議論の場を持てるとより理解に繋がるかもしれないと現在では思い返しています。その点も改善点だと思います。講義中での実験に関しては、積極的な参加をしてくれたら良かったと思いますが、その点についてもどうやって参加を促すかという方法論に改善の余地があると思っています。
行動生理学特講 I
少し内容が多すぎたこともあり、話す速度が速かったかも知れません。その点は改善点かと思っています。

山田 一憲
比較行動学・比較行動学特講 I
私が授業で伝えたかったことは、動物がかわいく賢いということだけではなく、動物について深く理解することによって、ヒトが行動し生きる理由を浮かびあがらせることができるという比較行動学の視点です。アンケートには「いろいろな生物と比較しながらヒトについて学ぶことができ面白かった」、「ヒトやその他の生物の在り方についていろいろと考えさせられました」というコメントがあり、その目的が達成できたことを嬉しく思います。

山中 浩司
文化社会学
回答者は、受講者の2割程度で少なかった。昨年より理論の解説を増やしたせいか、徐々に内容が難しいという回答が増えている。英文をそのまま表示したり、こまかいデータを表示したりするために、理解しづらいものになっている可能性があるため、来年度から提示の仕方を改善したいと考える。
文化社会学特講
回答者が1名のため、コメントは困難だが、パワーポイントによるデータの表示や、文の表示方法を改善し、みやすいものに改善することを検討する。

【2013 年度 後期 授業改善アンケート調査結果】

3-4. 授業改善アンケートの概要（2013 年度 後期）

人間科学研究科では、2004 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。2010 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2013 年度後期アンケート回答期間：平成 26 年 1 月 21 日～3 月 10 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 24.3%である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

2013 年度後期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象 科目数	回答数		対象 科目数	回答数
基礎科目	1	108	共通科目	3	15
共通科目	4	5	先端人間科学科目	2	0
行動系科目	13	219	行動学系科目	10	20
社会系科目	10	112	社会学系科目	6	11
教育系科目	11	140	人間学系科目	3	11
グローバル系科目	7	24	教育学系科目	9	40
			グローバル人間学系科目	8	14
学部計	46	608	大学院計	41	111
計(大学院+学部)				87	719

回収率：24.3%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、2010 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

3-5. 授業改善アンケートの結果（2013 年度 後期）

ここでは、2013 年度後期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目については除かれ、選択式の設問についてまとめている。

集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって 1 科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。今回のアンケートでは、学部共通科目での回答者が非常に少ないことから、共通科目については偏りがあることにも留意する必要がある。

2013 年度後期では、授業全体に対する評価についての問 13「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」（5 件法）の平均値が 3.87 であった（1～5 の範囲で数値が高いほど高評価）。2012 年度後期の平均値 4.00 を若干下回る結果となったことに注目されたい。

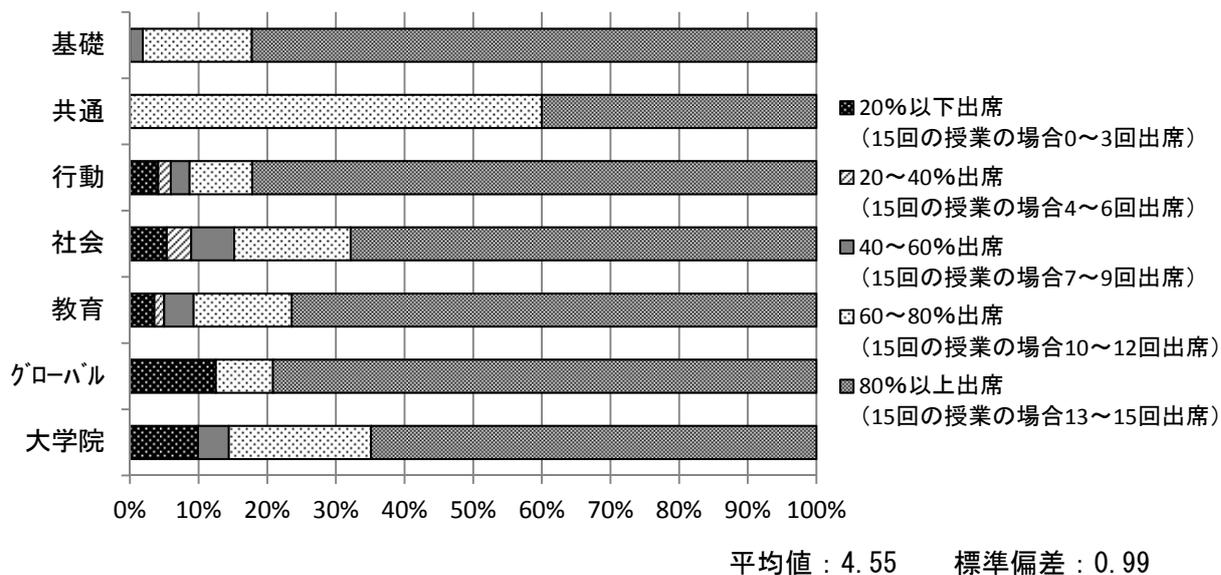
その他の設問についても、2013 年度後期と 2012 年度後期の平均値を比較すると、問 2 と問 4 を除くほとんどの設問で、平均値が低下している傾向がみられた。具体的には、問 1「この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？」は 4.57 から 4.55 へ、問 3「授業内容は理解できましたか？」は 3.79 から 3.77 へ、問 5「シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？」は 3.35 から 3.28 へ、問 6「授業はシラバスに沿って展開されましたか？」は 3.46 から 3.43 へ、問 7「授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？」は 3.97 から 3.81 へ、問 8「授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？」は 3.97 から 3.88 へ、問 12「この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？」は 3.93 から 3.84 へと、下回る結果であった。

2013 年度後期と 2012 年度後期の結果を比較したとき、改善の兆しがみられたのは問 2 と問 4 であった。問 2「この授業の予習・復習にあてた 1 週あたりの平均時間はどれくらいですか？」は 1.58 から 1.71 へと上昇しており、全体として学習時間が増えている傾向がみられた。2012 年度末に人間科学研究科本館の耐震工事が終了し、改修に当たって学生の自主学習や研究活動促進のためにインターナショナル・カフェやリフレッシュルームなどのスペースが設けられた。このようなスペースの設置が、学生の学習時間の増加に寄与している可能性がある。また、問 4「授業内容の難易度はどうでしたか？」（5 件法で 3 が適切）は 3.22 から 3.20 へと若干変化し、授業内容の難易度は適切な度合いに近づいていることもうかがえた。

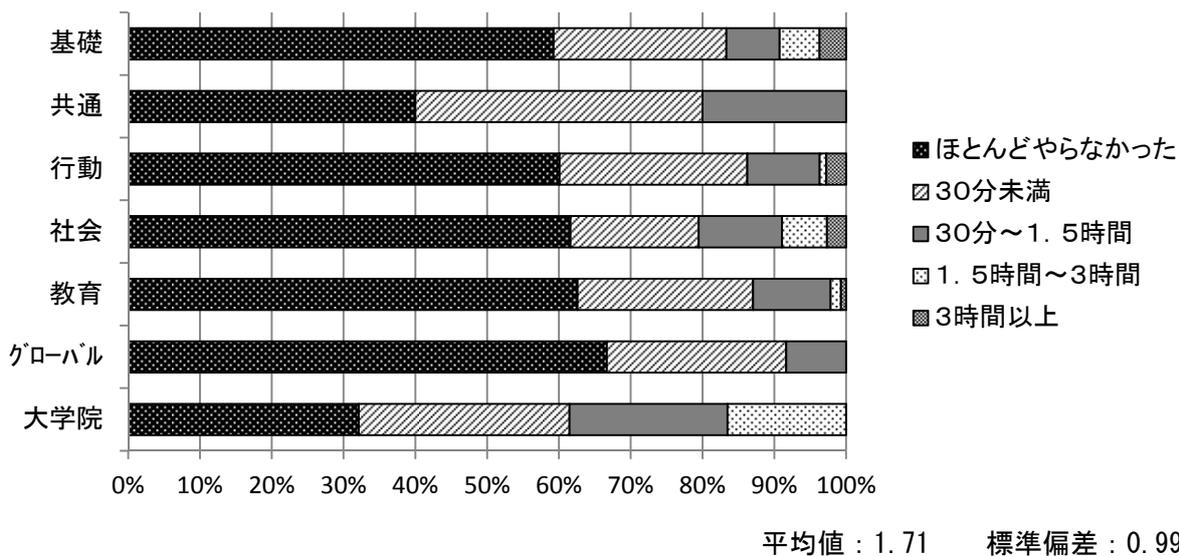
いずれにしても、回収率が今回の 2013 年度後期で 24.3%（2012 年度後期で 25.5%）と決して高い数値ではないため、調査結果をどれだけ妥当なものとするかについては慎重な態度が必要である。今後は、より多くの学生の回答を回収できるアンケート方法を検討していくことが求められる。

次頁から、各設問の結果の詳細を記載する。

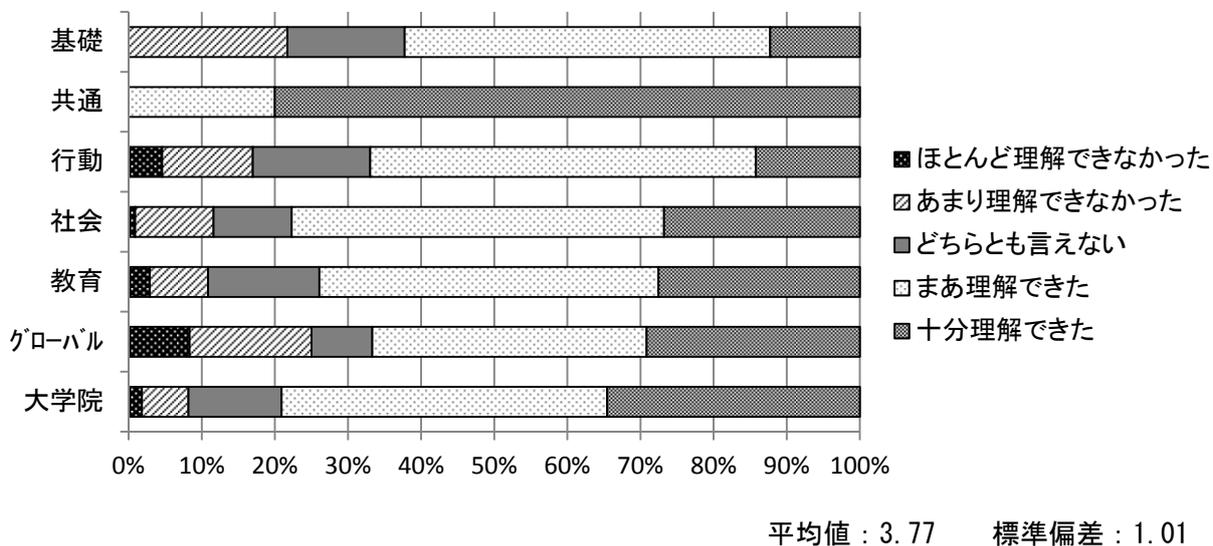
1：この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？



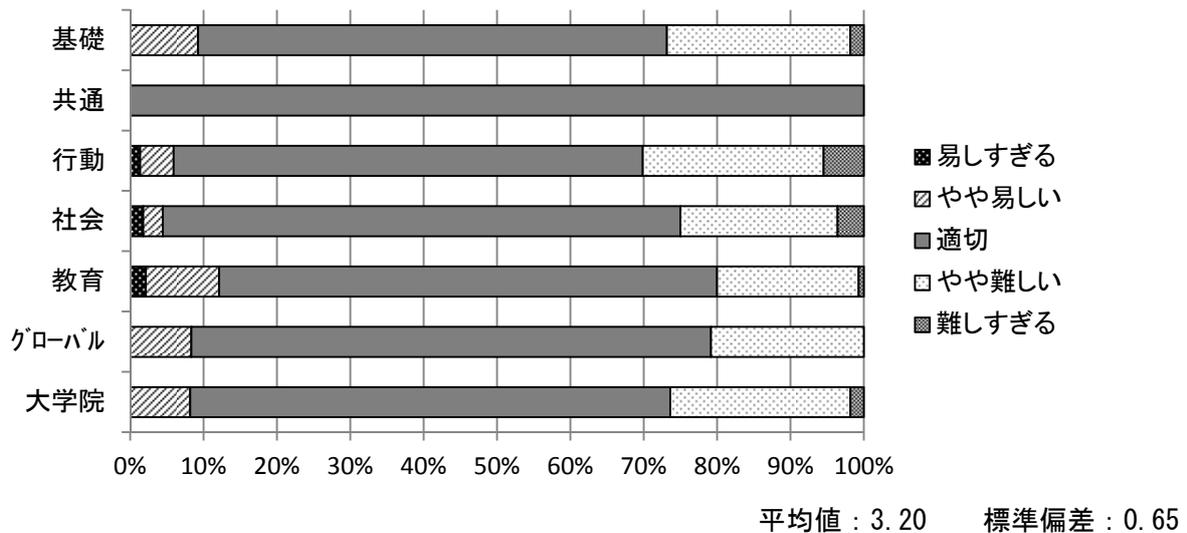
2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



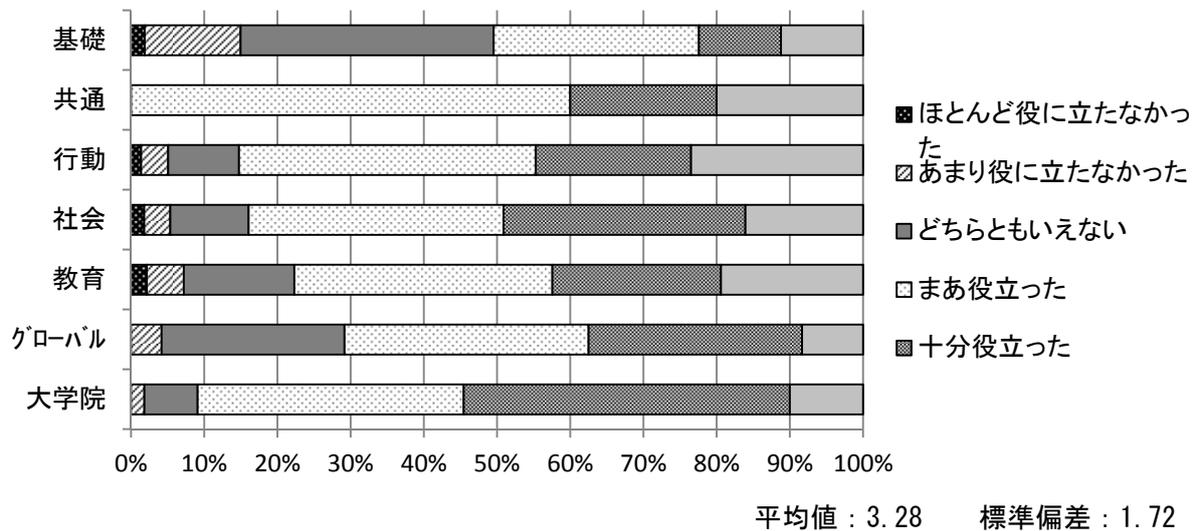
3：授業内容は理解できましたか？



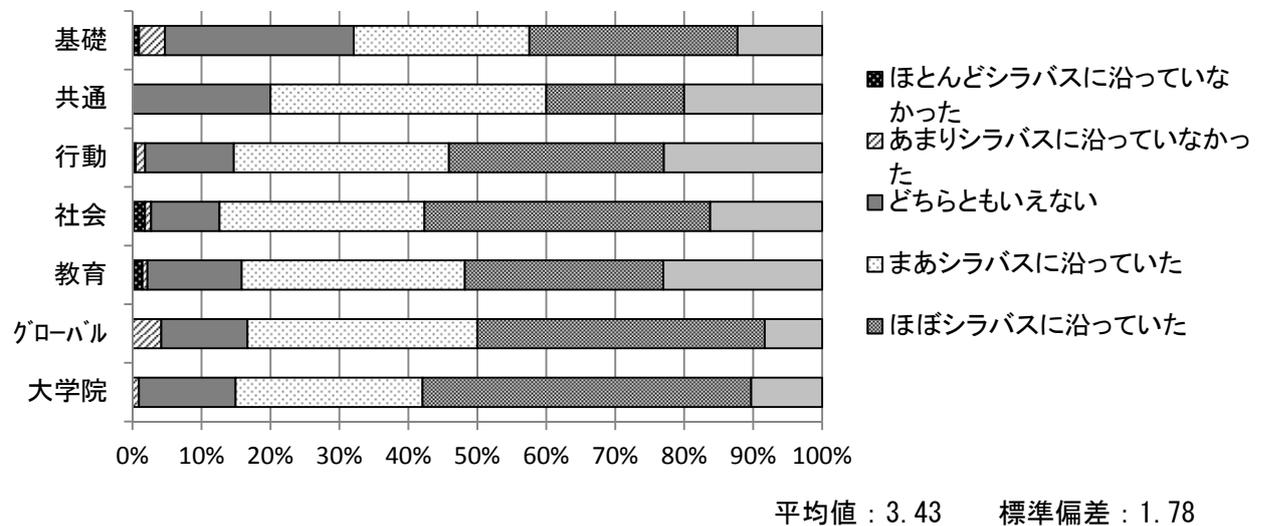
4：授業内容の難易度はどうでしたか？



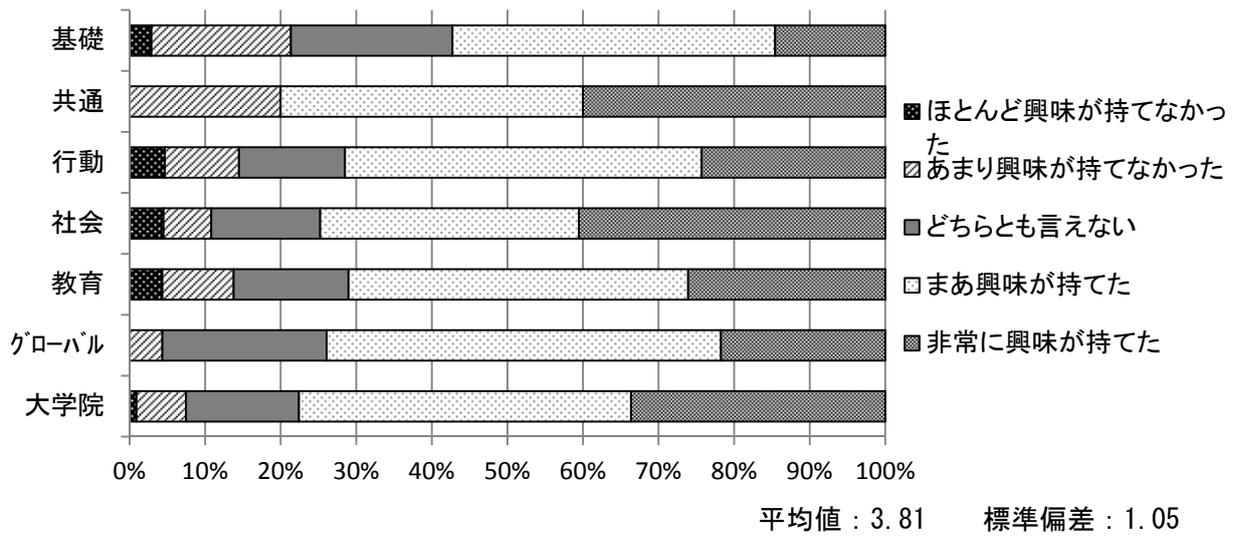
5：シラabusの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



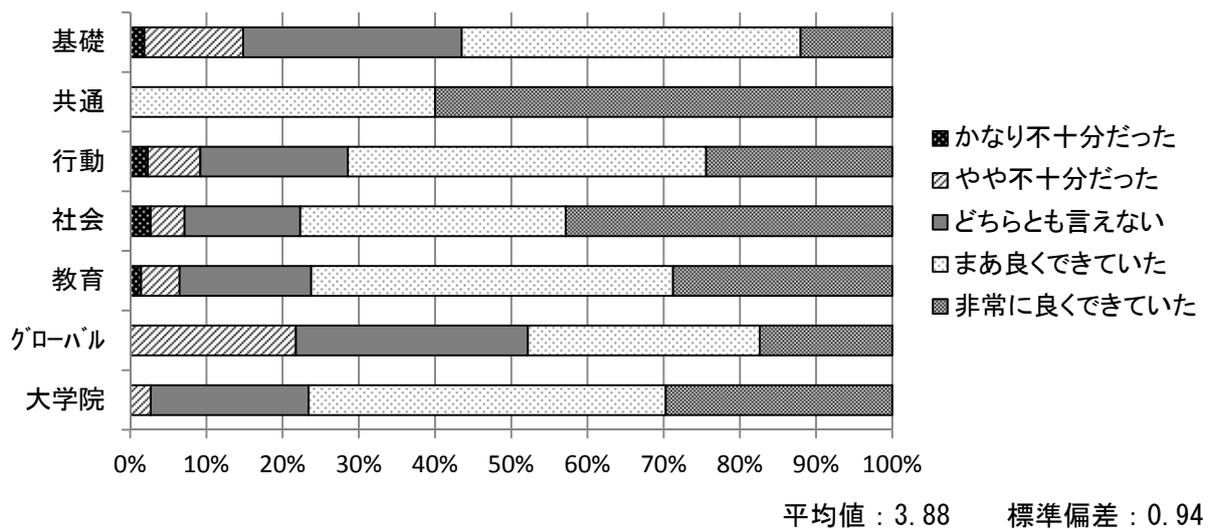
6：授業はシラabusに沿って展開されましたか？



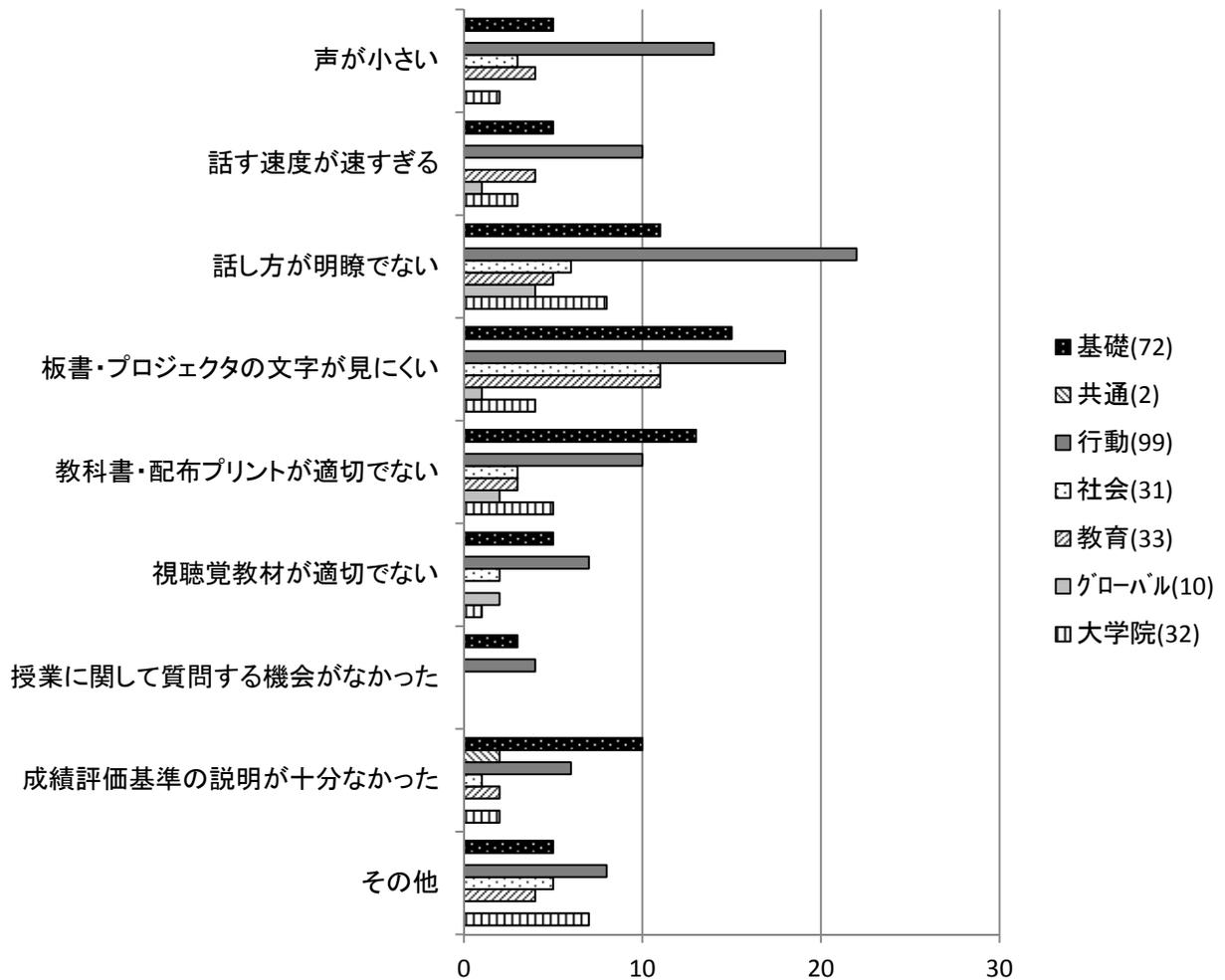
7: 授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？



8: 授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？

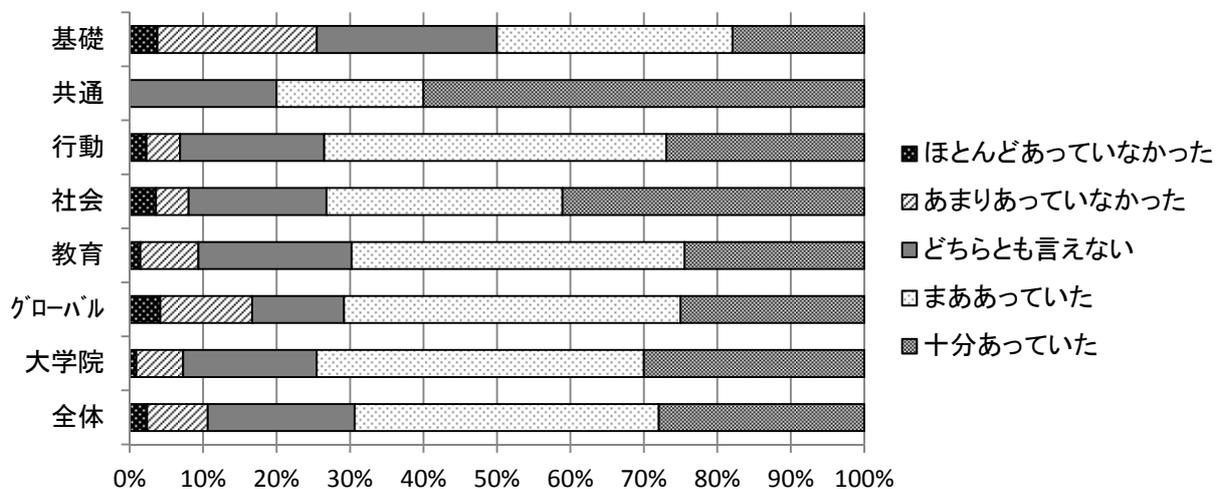


9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。()内の数値は各カテゴリーの回答数。



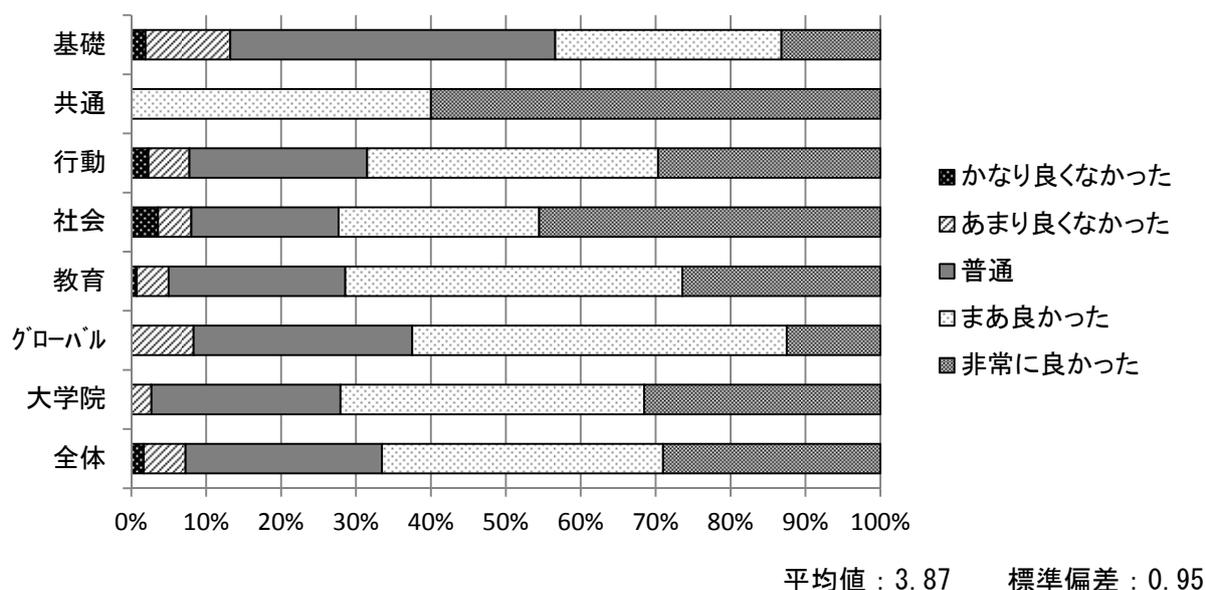
全体の回答数=279

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.84 標準偏差：1.00

13：この授業は全体として良い授業だったと思いますか？



問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2013 年度後期に開講された学部のアンケート対象科目 47 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 29 科目で、そのうち平均値が 4.0 以上の科目は以下の 14 科目であった。

2013 年度後期 学部講義科目 満足度の平均値が 4.0 以上の科目

	回答数	問 13 平均値
コミュニケーション社会学	26	4.69
基礎心理学	20	4.60
教育心理学 I	23	4.43
教育人間学 I	12	4.42
霊長類心理学	16	4.38
比較福祉論 I	10	4.20
行動生理学	11	4.18
人類学理論	18	4.17
臨床死生学・老年行動学	10	4.10
臨床心理学 I	20	4.10
適応認知行動学	22	4.09
リスク心理学	22	4.09
家族社会学	14	4.00
生物人類学	15	4.00

3-6. 担当教員からのコメント (2013 年度 後期)

以下は、授業改善アンケート対象科目について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である (教員名の五十音順に掲載)。

青野 正二
環境心理学・環境心理学特講 I
全体的として、回答は、回答番号(1)～(5)の(3)を中心に比較的広範囲にばらついていると思われる。これは、今年度は昨年度までと異なり、回答者の人数が顕著に増加したことが要因の一つと考えられる。回答者数は受講生の約3分の1であった。今年度は授業内容を見直し、各項目に割く時間配分も変更している。授業の難易度をみると、やや難しい傾向となっていたが、内容の理解度では、「あまり理解できなかった」と「まあ理解できた」の2つに回答が多かった。記述式回答の一例として、プロジェクターを使う授業でレジュメがなく、内容が聞き飛ばされてしまったことが書かれていた。そこで、授業で準備する配布資料の工夫を考えることで、より理解度を向上させることが可能ではないかと思われる。それと同時に、何らかの形で、受講生の理解度を確認するような方法を考えていきたい。

渥美 公秀
ボランティアの集団力学・ボランティアの集団力学特講
予期した通りの結果であり、特に問題ありません。

臼井 伸之介
リスク心理学・安全行動学特講 II
成績を出した人72名中(登録者83名)、アンケート回答者が22名(30.6%)と低率であった。授業終盤にアンケート入力を繰り返し依頼したにも関わらずこの低率は、現行回答方式の限界を感じざるを得ない。ただ回答者22名のうち20名は80%以上出席とあるので、回答結果は真摯に受けとめたい。「授業内容の難易度は適切」「授業内容は理解できた」がそれぞれ95%、82%という結果はよかったと思うが、特講の回答者(1名のみ)は「やや易しい」という回答だったので、合併授業とすることに問題があるかもしれない。「授業の準備状況は良く出来ていた」は73%、「授業は求めるものにあっていた」は77%、「授業は全体として良かった」は77%とまずまずの結果であったが、いずれの項目も4名(18%)が「普通」「どちらとも言えない」と回答しているので、そのような中間評価の回答を減らすようにさらに授業内容を工夫したい。

老松 克博
臨床心理学特講 II
今回の講義では、想像に関する技法の使い方よりも、想像そのものが秘めている臨床的な力を理解してもらうことに主眼を置きましたが、いずれ、より実践的な内容も扱いたいと思っています。臨床心理は、人それぞれ、オリエンテーションや興味関心がさまざま、すべての人のニーズを満たすことは至難の業ですが、皆さんの意見を参考にして努力します。

荻原 満里子
認知脳心理学
教室が狭かったということもあり、スライドを適切に移す時間が不足していたようで、この点の改善が必要だと思ふ。

小野田 正利
学校経営学特講
受講者は9名だったが、アンケート回答者が2名というのは残念だった。しかし、好評価であることは間違いないので、その点ではよかったと思ふ。

金澤 忠博
比較発達行動学
興味を持ってもらえる内容を心がけたので、殆どの方が興味を持って面白いと感じてくれていることがわかりその点ではよかったと思っている。話し方は聞き取りやすいように心がけたのだが、内容を詰め込みすぎたことも有り早口になってしまい結果として伝わりにくかったかもしれない。改善の必要性を感じる。コメントにも書いたが、毎回書いてもらった感想や質問に鋭いものや面白いものが多く、質問への回答の準備などを通じて勉強になった。受講者との interactive な授業にもなるので今後も続けたい。今後も最新の知見を取り入れ受講者の思考を刺激できるような授業を心がけたいと思ふ。

河森 正人
動態地域論Ⅱ・動態地域論特講Ⅱ
内容的には比較的よかったという意見が多かった。しかし、話し方に工夫が必要であるということがわかったので、今後改めていきたい。

吉川 徹
経験社会学・経験社会学特講
評価を真摯に受け止めて改善していきます。

木村 涼子
生涯教育学
毎回のフィードバックを大切にしながらすすめました。受講生の質問に対応するために、当初の授業内容のための資料にプラスアルファの資料を用意し、問題関心の共有と豊富な情報提供を目指しましたが、配布資料が多かったこと（印刷物）への不満も出ていましたので、そのあたりは来年度工夫したいと思ふます。学部生受講生に関しては、授業内容に関心をもって熱心に参加される方と、そうでない方にはっきり分かれていたような印象です。関心をあまり持てない受講生がいると感じた時に、もっと考えを引き出すような機会をつくり、授業内容を見直すことが必要だったかと思ふます。

生涯教育学特講

毎回のフィードバックを大切にしながらすすめました。大学院生の方々はほとんどの方が熱心に参加し、主体的に授業内容に関わってくださった方もおられましたから、私自身授業をすすめやすかったと思います。ただ、せっかくの院生の方々の主体性をもっと活かせる授業プランにできればよかったと、来年度参考にしたいと思います。

熊倉 博雄**生物人類学**

スライドの転換が早いと思われるかもしれませんが、同一スライドを複数回掲示しているの、そう思われるのかと思います。データを見てもらうことが肝要なので、「まとめ」を提示して「データ」を提示し、再び「まとめ」を再掲示するというやり方です。この点は1回目の講義で説明しているつもりでした。板書の時間をとるように気をつけようと思います。

生物人類学特講Ⅱ

修士の講義科目ですが、受講生のスキルを向上させることを第一義にしています。具体的には、実習要素を中心にしているので、「講義」という意味では満足感が少ないかもしれません。

近藤 博之**教育動態学**

約3分の1の人の回答ですが、今回も評価がだいぶばらつきました。多様な関心をもつ受講生全員に平均以上の評価をしてもらうのを目標にしていますが、残念ながら一度も達成したことはありません。依然として、色々なことを反省しながら取り組む必要があるようです。

教育動態学特講

テキスト原稿を配布するなどして、そのつど確認できるように授業を進めたので、資料に対する評価は妥当なものだと思います。ただ、難易度が高いというのはやや意外でした。毎年、話し方に対する問題点を指摘されるので、そちらにもできるだけ注意を向けていきたいと思っています。

斉藤 弥生**比較福祉論Ⅰ**

授業の予習や復習をしている学生が少ないようなので、来年度は少し工夫したい。

比較福祉論特講Ⅰ

学部との合併授業なので、大学院生には内容が易しすぎる心配があるが、この点については配慮していきたい。

佐々木 淳**臨床心理学Ⅰ**

アンケート結果から、一定の教育的な成果があったものと考えられる。板書の仕方については念頭におきたい。今後も授業内容と方法の充実に努めたい。

佐藤 眞一
心理学測定(基礎科目)
5名の教員によるオムニバス形式の実習および講義による科目である。アンケート結果はおおむね良好だが、3コマ連続の授業のため教員も学生も疲弊することが多いようである。来年度から1コマの授業（行動学概論）と1コマの方法論（行動学研究法）に変更する予定である。
臨床死生学・老年行動学 臨床死生学・老年行動学特講 II
研究分野の3名の教員による講義科目である。回答者が少ないが、評価は良好であった。ただし、予習することがほとんど無いので、授業前の予習指示などについて検討の余地があると思われる。

澤村 信英
国際協力学II・国際協力学特講II
大学院生と学部生のアンケート結果には有意な差がある。大学院生は講師の研究関心に近いので肯定的な評価であるが、学部生はそうではない。授業を英語で行うので、余計にそのような傾向が顕著になるのかもしれない。そのようなあまり関心のない学部生にどのような対応をすべきかは、難しいことでもある。また、事前学習を促進するための課題等を出しても、多くの受講生は予習をすることがない。それを改善するためには、授業の組み立てにおいて工夫すべき点も少なくないが、学生側の自覚を促すことも必要かもしれない。

篠原 一光
適応認知行動学・適応認知行動学特講I
アンケート結果から特に大きな問題はなかったと判断するが、若干「難しすぎる」との評価があることが気になった。内容的として、かなり難しい内容を扱っているとは考えにくいので、講義の構成をよりわかりやすくする必要があると感じた。配布資料や提示用資料の作り方を検討し、より分かりやすくなるよう努めたい。また、教室の構造により資料提示が見にくいとの評価があるが、来年度も同じ教室を使用する予定なので、前方に投影するタイプの資料の使用頻度を下げ、手元資料での説明を重視するよう修正したいと思う。

志村 剛
行動生理学・行動生理学特講II
授業は概ねシラバス通りに実施し、神経科学の基礎的知見を理解するという、所期の目的を達成できたと考える。受講者の半数以下の回答ではあったが、授業内容への関心や、授業自体の評価も高かったようで、担当者としての責務は果たせたと思う。受講者数と教室の設備とのバランスもよく、肉声で十分コミュニケーション可能だと判断していたが、聞き取りにくい学生もいたようで、今後マイクの使用なども考慮したい。さらに、双方向型の授業を目指して改善する必要があると感じている。いずれにせよ、学生諸君の授業態度も上々で、受講者にとっても教員にとっても満足できる内容になったと思う。

高田 一宏
教育文化学
受講者数の割にアンケートの回答者が少ない。回答してくれた人はお高い評価をしてくれているが、受講生の学習意欲にばらつきがあることも事実で、予習・復習の手引きを工夫したい。
コミュニティ教育学
3年後期の配当であるためか、例年、後半に出席者が減少する傾向があるが、出席者の評価はおおむね良好である。

辻 大介
コミュニケーション社会学
今年度も概ね高評価でした。自由記述欄で「これまでの授業で3本の指に入る」とか「一番好きな授業」とか「90分間のめり込むように楽しんで受講できた」とか書いていただいたのは、ありがたい限りです。ただ、映像資料を多用する講義なのに、新しい機材のためか画面によくちらつきが入ったので申し訳なく感じています。この点は事務的に点検修理を依頼してあります（教室自体は使いやすかったので次年度も継続予定）。また、学部生・院生の質問紙調査に2回協力してもらいましたが（受講生のみなさん、ありがとうございました）、おかげで少し授業内容を割愛した部分が出てしまったのが反省点です。次年度からは極力質問紙調査の協力は行わず、せめて1回限りにします。

友枝 敏雄
社会学説史・社会学説史特講
（学部生に関して）回答者数が少ないので、何とも言いがたい面がありますが、「講義内容が少し難しかった」ということですので、当初の目標通りかと思えます。私の学生時代の経験から、講義は少し難しいぐらいがよいと考えています。なぜなら、学生からすると「勉強しないと大変なことになる」と思って勉強するからです。板書の字が見えにくいというのは、学生さんにはいつも、「近眼で見えにくい人は前に座って下さい」と言っているのですが・・・・・・学生時代、私自身、近眼でしたので、前に座るようにしていました。今後工夫しますが、黒板の大きさもあり、なかなか難しいですね。今回も、配付資料を配って板書の量を減らしたりしましたが、完全にうまくいく方法はないような気がします。歯切れの悪い回答ですが、記しておきます。（大学院生に関して）それなりに、好評だったようですので、特別に記すことはありません。

中川 敏
人類学理論・人類学理論特講
板書をもうすこしきれいにする。

中澤 涉
教育と社会
全体としては悪くない評価だと思ったが、勉強している学生が少ない。少し学習のインセンティブを増すような授業になるような工夫ができないかと考えている。

中道 正之
霊長類心理学・比較行動学特講 II
出席者が毎回 35 名前後で、アンケートの回答者が 16 名であったというのは、残念ではあり、もっとアンケートに回答してもらえるほどの魅力的な授業が必要であるとも思いました。積極的に挙手してもらって授業になるよう努力しましたが、かなりの学生の人たちが意見を述べてくれたのは、大変感謝しています。霊長類の母子だけに絞って授業を進めたが、もう少し広くいろいろな霊長類の行動について知りたいという意見があり、今後の内容を見直したい。

中村 安秀
医療通訳とコミュニティ
8 名からの回答をいただきました。全員が難易度が適切と答え、十分に役立ったという回答が多かったです。「このクオリティーの授業を副専攻として、授業料の範囲内で受講できたのは、ありえないくらい素晴らしいことだと思った」というご意見をいただき、本当にうれしかったです。今後もこの講義の質を落とさないように、継続していきたいと思います。また、12 時の終了時間が過ぎて学内バスに乗り遅れたとのこと、また、机の上や床など教室がいつも汚れていたとのこと、今後の改善に努めたいと思います。

中山 康雄
言語・情報論
授業内容が難しいという声がある程度あった。今後の参考にしたい。
言語・情報論特講
今回のアンケートでは、だいたいの点で満足している学生が多かったのも、特に問題はなかったように思う。

西森 年寿
教育工学 I・教育工学特講 II
授業についてはある程度満足してもらえたようです。引き続き、内容の向上に努めたいと思います。「板書・プロジェクタの文字」については、教室プロジェクタは今年度輝度が向上したので、もしかすると、テレビ会議の際のことなどを指摘してくれているのかもしれませんが。事前の準備を十分したいと思います。「成績評価の基準」については、授業中に一定の説明をしていると思いますが、疑問があれば質問を受け付けたいと思います。「講義をもう少し増やして」という要望については、間接的ですが、提供する資料などの情報量をあげるなどの対策が必要かなと感じました。回答ありがとうございます。

野坂 祐子
教育心理学特講
受講者が熱心に討議に参加して、よかった。

福岡 まどか
実践的文化交流Ⅱ
この授業では講義形式ではなく、ワークショップ形式で楽器演奏やダンスなどの実技を行いました。今回は、外部講師による特別ワークショップも行われました。最終発表会の演奏もいい演奏が多かったです。受講者の皆さんからの感想は授業の中でもききましたが、実技の内容なども概ね好評だったと思います。今後の授業もこのやり方で少しずつ内容を変えながら取り組んでいきたいと思います。
藤岡 淳子
教育心理学Ⅰ
回答ありがとうございます。参考にします。
藤川 信夫
教育人間学Ⅰ・教育人間学特講Ⅱ
概ね目標を達成できたのではないかと思います。ただし、今後は、大学院と学部の合併授業である特性を活かして、大学院生と学部生の共同学習的場面をより多く設定してみたいと思う。
牟田 和恵
家族社会学・家族社会学特講
回答者は少ないが、参考になった。自学の機会を増やす目的で、今年度は事前の学習を促す小課題を複数回課した。その効果で多少は学習時間が長くなったのではないかと考えている。
村上 靖彦
現代思想論・現代思想論特講
概ね好評だったので良かったです。来年度もしっかり準備して、臨みたいと思います。
森川 和則
基礎心理学・基礎心理学特講Ⅱ
回答者 20 名中、1 名だけほとんど授業に出なかったのに（問 1 で出席率 20%以下）機械的に最低評価をしている者がいる。授業に出ないで授業評価をすることはアンケートを愚弄している。この学生にはアンケートに答える資格がないので、この学生は集計から除外するべきである。この学生は「成績評価の基準について十分説明がなかった」と答えているが、全く事実と反する。私は成績評価の基準をシラバスや授業で明確に説明した。この不真面目な学生一人のためにアンケートが台無しになっている。この 1 名を除くと、問 13 において回答者 19 名中 15 名は「非常に良かった」、4 名は「まあ良かった」であり、平均値は 4.79 であり、学生の評価は非常に良いと言える。教室が狭かったという意見があるが、キャバ約 70 名の教室で出席者 50～60 名だったので、特に狭すぎることはないと思う。

山本 ベバリー・アン

Sexuality and Education・セクシュアリティと教育特講

This class was very small with about half the students auditing. We had some really good discussions and the final presentations and portfolio assignments were very interesting for all of us as we learned about aspects of sexuality education that were important in other countries. It was disappointing that a couple of students who had come to all classes and participated actively did not hand in their final assignments.